

2017年度 大学共同研究（公募研究A） 研究成果報告書

所属・職・氏名：高等教育推進センター 専任講師 時任隼平

研究課題：同一ミッションに基づく高大一貫教育における「学びのトランジション」に関する研究

研究期間：2017年4月1日～2018年3月31日

研究成果概要（2,000字程度）

<研究の目的>

本研究の目的は、同一のスクールミッションに基づく高大一貫教育の事例として関西学院千里国際高等部を取りあげ、高校在籍時の学びと大学入学後の学びにどのような繋がりが生起しているのかを明らかにする事である。

<研究の対象>

本研究では、本調査の対象（A群）を2014年～2017年の間に関西学院千里国際高等部を卒業し、関西学院大学に入学した者とした。具体的には、2014年卒業生33名、2015年卒業生20名、2016年卒業生22名、2017年卒業生38名の合計113名からデータ収集を行った。

また、分析・考察結果の妥当性を検証するため、関西学院大学以外の高等教育機関に進学した調査対象（B群）として、2014年卒業生28名、2015年卒業生27名、2016年卒業生36名、2017年卒業生32名の合計123名からデータ収集を行った。

インタビュー調査では、関西学院大学に進学した2014年卒業生19名と2015年卒業生10名を対象にデータ収集を行った。

<研究の方法>

本研究では、主に質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査では、高校在籍時の学びにと大学在籍時の学びに関する質問項目を設けた。具体的には、高校在籍時の授業における学びがいに対する自己評価得点（10点満点）と大学在籍時の授業における学びがいに対する自己評価得点（10点満点）やその理由、学びがいのあった授業の詳細や学びがいのなかった授業の詳細について回答を求めた。インタビュー調査では、質問紙調査の回答結果に関する詳細についてデータを収集した。

<結果>

質問紙調査を分析した結果、関西学院大学に進学した卒業生113名の学びがいに対する自己評価は、高校での学びがい（平均=8.15 SD=1.627）が大学での学び（平均=5.91 SD=1.976）に比べて有意に高い（ t 値=9.423 p <0.01）事が明らかとなった。その傾向は、関西学院大学以外の国公私立高等教育機関に進学した学生からも明らかになったことから、関西学院千里国際高等部を卒業した学生は、在籍する高等教育機関において高校在籍時以上の学びがいを感じていない可能性が示唆された。

関西学院大学の学生が学びがいを十分に感じていない要因として、下記のような自由記述が多く見られた。

大学の授業における学びがいに対する記述

- ・先生の声が聞こえにくく（もごもご話す系）何を話しているのか分からなかったしよーく聞けば聞くほど眠くなった。試験内容も毎回同じらしく、周り誰1人勉強してなかった。
- ・教授のやる気のなさ。レジュメやパワポをただ読んでいるだけの授業や、提出された課題をそもそも見ていない。
- ・パワーポイントに映されたことをプリントに穴埋めする授業がやりがいを感じなかったです。先生もただパワーポイントを読むだけでやる気を感じられませんでした。そして学期の最後に大きなテストがあり、授業は面白くないし先生もやる気もないのに最後に頑張らなくてはいけなくて嫌になりました。

また、高校時代の学びがいのある授業に関する自由記述からは、下記のような記述が多くみられた。

- ・特に、**English**。常にフィードバックや、評価を細かく受けられ、自分の伸ばすべき点、強み、弱みなどが把握でき、その結果、自分の成長を常に実感できていたから。
- ・少人数でまた、参加型であること。先生がただ教科書にそって授業をしてだけでなく、先生が自ら準備して生徒に分かりやすいように努力してくれた教材で授業ができるから。先生と生徒の距離が近く、時には先生と一緒に授業を進めていっている感じがして授業が楽しい。常に質問するのが自然で、先生も質問されて怒らないし、むしろ喜んでくれる。どんな考え方もいいねーと受け入れてくれることで、自分の価値観が否定されないの、なんでも質問しやすい。課題でも自分の好きなことについて調べて発表できるので、自分が好きなことへの知識を深めることができる。
- ・先生との距離感が近く監視されている感じが、授業中に寝ることがほとんどなかったため。また、大学とは違い授業中でも問題を与えられて解くことが多かったため、より集中できた。

これらの結果とインタビュー調査結果を総合すると、関西学院千里国際高等部を卒業した生学生たちは、高校での「少人数制」「教員によるきめ細かな指導」を前提とした学習環境における学び方から、大学での「多人数制」「教員による講義型の指導」を前提とした学習環境に置く学び方へのトランジションが十分にできていない可能性が示唆された。しかし、大学での全ての学びに対して否定的な態度をとっている訳ではなく、多くの学生が大学における専門演習の授業（ゼミや高度な知識を扱うもの）と自らの興味関心が合致した場合に学びがいを感じていると回答している。つまり、初年次教育等の「多人数制」において、講義型の指導が中心となった際、そこでの学び方を自ら見つけることができなかつた場合において、学びがいを感じることができていない可能性があると言える。

「少人数制」で「教員によるきめ細かい指導」が用意された教室は理想的な学習環境ではあるものの、大量の知識・技術の習得を目的とする場においてはそのような学習環境が常に用意されているとは限らない。本調査によって、多様な学習環境における学び方の習得に慣れる必要性が示唆されたと言える。